

行政視察報告書

会派) みんなの未来		平成29年8月31日(木) 9:10~11:10
視察先 及び 調査事項	青森県 黒石市	1. 黒石市の概要について 2. 松の湯交流館について 3. 中町こみせ通りについて
1. 黒石市の概要について		
・弘前藩から分地(1656年)以来、城下町として栄え、明治以降も南津軽の中心地として政治・経済・文化の中心をなしていた。昭和29年7月1日に1町4村が合併し、黒石市として県内4番目の市制を施行した。		
交通環境的には、国道や東北自動車黒石ICに加え至近距離に青森空港がある等交通の要衝となっている。		
古くから「りんごと米と温泉の田園観光都市」として親しまれており、「中町のこみせ」が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されるなど、近年は特に、城下町の風情を残した街並みや建造物が高く評価されている街である。		
・人口:34,284人であり、議員定数:16人(内、女性議員は3人)であり、議員平均年齢:57.8歳、最長期:10期の議員体制である。		
2. 松の湯交流館について		
①松の湯交流館とは、		
・交流の場所としての意味を受け継ぎ、風の人(訪問者)と土の人(市民)が語り、ふれあう等、様々な形で交流して欲しいという願いが詰まった場所である。		
・松の湯交流館は、地元の人には自分の場として、買い物の足休めや、文化・芸術活動の発表の場、そして、会合の場所として気楽に利用してもらい、来訪者にはまちなか散策の休憩・案内所として、その土地ならではの文化や人に触れることのできる場として気軽に利用できる施設である。		
②松の湯の歴史		
・松の湯は、力強い生命力を感じさせる松の木が印象的な銭湯であった。		
建てられた江戸時代の当時は、旅籠であったと伝えられており、その後、銭湯に生まれ変わった。当時の銭湯は、人々が集まるコミュニティの場であり、まちの情報溢れる場所であった。平成5年にその役割を終えたが、街のランドマークとして保存と活用が望まれ、平成20年に市が取得し、当時の姿そのままに、平成27年に「松の湯交流館」として生まれ変わった。		

3. 中町こみせ通りについて

①「こみせ」とは

- ・「こみせ」とは、町屋と商家の軒の外側に、冬の吹雪や夏の日照りから歩行者を守るよう、軒のように作られた屋根で、藩政時代に考えられた木造のアーケードと言えるものである。敷地は私有地であり、屋根は本屋とは別になって両隣と連続しており、それぞれの所有者によって管理されている。
現在は、単なる通路となっているが、以前は、大通りに面した柱と柱の間に摺り上げ戸をはめ込んで、厳しい自然環境から通行人を守っていた。

②中町こみせ通りとは

- ・江戸時代前期から続くアーケード状の通路で、まとまった形で残されているのは全国的にも類例がないといわれている。このアーケード状の通路空間は、通りに軒を連ねていた旅籠や呉服屋、商家にとってはなくてはならないものであった。現在は、国の重要文化財「高橋家住宅」、造り酒屋、蔵等が並ぶ。
- ・平成 17 年に、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定され、この一部区間の 0.6 k m が「日本の道 100 選」に選ばれている。

4. 黒石市のまちそだてについて

①歴史的な景観の保全と形成

- ・「中町こみせ通り」の景観保存、官・民・学の協働による「旧松の湯」の再生を中心とした“黒石らしい景観形成と快適な回遊空間”づくり

②まち歩き環境整備と推進

- ・まち歩きによるまちなかの活性化、まち歩きルートの整備、まち歩き観光の推進

③地域資源の活用

- ・「その土地ならではの文化」に触れ合い感動を覚える「小さなまちかど博物館（現在 20 館）」による、“滞在時間の延長”

④まちづくりを推進する人材育成

- ・現場主義に基づき、イベントに偏らない包括的なノウハウを提供し、現地での実践的体験を通して“まちなか《通り》再生プログラムづくり”に向けた「再生マネージャー」の育成

⑤その他、庁内連携としての「まちなか活性化庁内検討会議」の展開など

【考察】

・ “観光客は増加しているが、滞留時間が極端に短く、効果が得られていない” という課題は当市と同様な傾向である。点から線に、そして、面（エリア全体）で観光する環境整備が必要である。

・ 一方で、成熟化社会を迎え、観光客のニーズは、その土地ならではの生活や暮らしの知恵に触れ、その地域を体感したいという傾向が強くなっている。これらへの対応として、改めて、まちなかにある小さな個性（地域資源）の発掘と活用が大切と考えられる。その為には、地域外の人視点も有効と考える。

・ この中で、「小さなまちかど博物館」構想は、当市の「まちなか博物館」構想と重なる面があり、参考とすべきと思われる。

・ まちづくりを推進する人材育成に関しては、地元としての“官・民・学”の連携はもとより、サポーターとしての高齢者との連携も有効と思われる。

～ 以 上 ～（小林弘明 文責）